

バンベルク大聖堂《騎馬像》に関する考察—聖なる統治者の表象として—

仲間 絢（東京藝術大学）

バンベルク大聖堂聖ゲオルギウス東内陣壁上の《騎馬像》（1230年代）は、中世の聖堂内部に展示された唯一の等身大騎馬像の作例であり、騎手は当世の宮廷風衣装に身を包み、黄金の冠を被った青年像である。先行研究でさまざまに解釈されてきたが、近年ではハンガリーの聖シュテファンや三王礼拝の若い王と同定する説が有力視されている。しかしながら、これらの人物への特別な崇敬は当時の聖堂において確認されず、また図像上も十分に説明しえない点があり、いまだ定説は存在しない。

本発表では、先行研究でも指摘されているビザンティンの伝統から考察を深めたい。当聖堂彫刻群はデエシス像や聖母マリア像などの表現において図像や様式にビザンティンの伝統への傾倒が色濃くみられる。くわえて、ビザンティンの要素は11世紀の聖堂設立者である神聖ローマ帝国皇帝ハインリヒ2世が収集した宝物—聖なる統治者が騎馬像で表されたテキスタイルやオットー朝写本の統治者の肖像など—にも認められる。また、オットー・フォン・ジムソンが《騎馬像》との関連において紹介したように、南フランス地方の12世紀の聖堂扉口彫刻にはキリスト教の指導者としてのコンスタンティヌス大帝の騎馬像が多く残されている。

一方で、当聖堂の《騎馬像》が連結する主要扉口「君侯の門」は、シュテファン・アルブレヒトなどにより、旧約聖書『雅歌』を典拠としたことが認められている。『雅歌』とは、夫婦の愛の賛歌であり、キリスト教の伝統では、キリストとマリアの結婚を示す花嫁神秘主義の原典とされた。クレルヴォーの聖ベルナルドゥスに代表される、キリストとの一体を目指した情緒的な信仰態度に基づく教えとなり、12、13世紀に聖母マリア崇敬と結びついて幅広い影響力を持った。13世紀の当聖堂は第二のマリア、および、キリストの花嫁として崇敬されたハインリヒ2世の皇妃、聖クニグンデの聖堂として再建された。同時期の聖クニグンデ聖堂壁画などにも聖なる騎手の図像が確認される。

《騎馬像》においても、その台座のアカンサスとバラのレリーフの表現は、「茨の中のバラ」という『雅歌』のモチーフを示唆すると考えられる。《騎馬像》が立つ本内陣が聖母マリアの祝祭を主要用途とした歴史的事実との関連も示している。騎手は「君侯の門」から入堂する鑑賞者にその後ろ姿を見せることで、典礼の行列が行き来した身廊空間に鑑賞者を導き入れたとされるが、《バンベルク雅歌写本》（1000年頃）挿絵における聖なる花婿に導く花嫁たちの行列と主題性を共有している。

彫刻群の出資者とされるフリードリヒ2世が自身をドイツの諸侯に向けて聖なる花婿としてプロパガンダを行った歴史的事実も鑑み、本像はビザンティンの伝統と聖母マリア崇敬に倣い、政教一致の理想に基づく聖なる統治者を表現していたと考える。